

## 「電話機は“島”に1つ」ソフトフォンを活用する

1台数万円もする高価な多機能電話機。社員数が多い場合、その購入費は多大なものとなるが、内線側をIP化して、この費用を低く抑えることも可能だ。電話機購入費に比べればかなり割安な水準でライセンス費が購入できるソフトフォンを活用するのである。

もちろん、PCが起動状態でなければ使えず、すべての電話機をソフトフォンに置き換えることは現実的でない。だが、携帯電話が貸与されている営業社員(外出も多い)や、電話をあまり使わない研究職など、電話の使用頻度に応じて個人あるいは部署ごとにソフトフォンを配し、電話機の台数を減らすことは有効なコスト削減策となる。電話する機会そのもの

が減少し、しかも、誰もが業務中、常にPCの電源をONにしている現在、拠点や部署の代表番号ごとに1台だけ固定電話機を置き、社員個々はソフトフォンで業務を行うといった運用方法も十分に可能はずだ。

また、初期コストだけでなく、導入後の運用コストも低減できる。ハードウェアである電話機と違って壊れることはなく、ソフトウェアのアップデートで機能追加や変更も可能だ。社内のどこに移動しようとPCをLANケーブルに接続すれば使用でき、内線番号の変更などに伴うコストも排除できる。

ソフトフォンを活用する場合は、その運用を容易にするための電話システムの機能も重要だ。



OKIネットワークスの「Com@willソフトフォン」

例えば、OKIのIPテレフォニーサーバー「SS9100」は、電話着信側の状況に応じて最適なルートを選択する機能を備えている。社員個々が状況に応じて着信する方法を自分で設定できるため、外出中などの「Com@willソフトフォン」で受信できない状況では、自分宛の内線電話を自動的に携帯電話に転送させることが可能だ。

同社は昨年のオフィス移転後、自社内でも固定電話機からソフトフォンへの移行を推進しているという。

## 小規模・一時拠点は「電話機だけ」で十分

複数拠点を持つ企業、特に大手企業で採用されることの多いセントレックス型の電話システム。通常、拠点側にも、センター側のIP-PBXと連携するPBX主装置や専用ユニットを設置する必要があるが、数人程度の小規模拠点や一時的に設置する拠点等では「主装置なし」で安価に内

線システムを構築することもできる。

ウィルコム(W-VPN)を利用すれば、拠点側にはPHS電話機のみを導入するだけで内線通話が可能だ。日立コミュニケーションテクノロジーのラインキー付き卓上PHS「PHS-30DA」は、ワンタッチダイヤルやハンズフリーなど、通常の高機能電話機と同等の機能が使える。

また、中小規模向けのビジネスホンでも、IP網を経由したセントレックス型システム構築は可能だ。OKIネットワークス事業本部ソリューション第一部の丸井武士部長は、「IPビジ

ネスホン『IPstage SX/MX』では、小規模拠点にルーターと電話機だけを設置し、IP網を経由してセンター拠点の主装置から拠点内の内線電話機を制御できる」と語る。

もちろん、小規模・一時拠点の電話はセンター側と連携させず、単独電話機や携帯電話のみで運用するという考え方もある。だが、前述のような仕組みを利用すれば、拠点の人員が不在のときは同拠点宛の電話をセンター側で受けるといった運用も可能になり、PBX機能の恩恵を低コストで享受できる。中小事業所に対してコストメリットの高いシステム提案が可能になる。



日立コミュニケーションテクノロジーの卓上PHS「PHS-30DA」